

令和7年3月24日
釜石海上保安部

鮭ヶ埼灯台は災害に強い灯台に生まれ変わりました

～さよなら鮭ヶ埼灯台のフレネルレンズ～

岩手県宮古市重茂の本州最東端の地に立つ鮭ヶ埼灯台は、3月11日に、電源が商用電源から太陽光発電に、光源が電球(放電灯)からLED(発光ダイオード)に変更、停電の影響を受けない災害に強い灯台に生まれ変わり、消費電力もこれまでの約1/5になりました。

鮭ヶ埼灯台の商用電源は、姉吉漁港付近から灯台まで約4kmの山中を東北電力ネットワーク株式会社の架空配電線路を経由して供給されています。

これまでに、台風や発達した低気圧等の影響で、倒木や斜面の崩落により電柱の倒壊や架線の切断が幾度となく発生、その度に停電が発生し、非常用発電機で灯台の電源を維持しました。

特に、令和元年10月13日の台風13号では、配電線路の復旧に時間を要し、19日間にわたって停電が続き、職員が約4kmの山道を灯台まで非常用発電機の燃料を背負って補給、灯台の灯火等を維持させました。



災害に強い灯台への工事に伴い、2月12日には、昭和25年6月23日から今日まで、およそ75年間、三陸の海のみちしるべとして、船の航海の安全のために本州最東端の海を照らし続けてきたフレネルレンズも役目を終えました。

役目を終えたフレネルレンズの撤去作業が2月14日から始まり、多くの報道機関(テレビ5社、新聞等4社)が取材、広く報道されました。

鮎ヶ埼灯台は、明治35年3月1日に設置され、太平洋戦争中の昭和20年7月14日にアメリカ軍の攻撃で破壊されましたが、戦後間もない昭和25年6月23日に、海上輸送路の戦災復興のために再建され、今日まで、このレンズが大切に使われてきました。

なお、このようなガラス製の大型レンズの製造技術は既に世界中で途絶しており、二度と製造できません。

釜石海上保安部では、撤去したレンズを博物館、教育施設や地方自治体等に譲渡し、多くの人々に見てもらうために展示してもらい、海上輸送の重要性と海難防止や海上保安業務の理解促進に役立てたいと考えていたところ、地元の宮古市長から譲渡申し込みがあり、3月24日に宮古市に譲渡いたしました。

フレネルレンズは、宮古市で展示され、多くの人々に、その歴史や文化的価値を知ってもらい、新たな役目に就く見込みです。



鮎ヶ埼灯台と同型レンズ(3等大型フレネルレンズ、直径約1.7m、重量約800kg)



鯨ヶ崎灯台



電源を太陽光発電に変更



LED光源を使用したLED回転型灯器に変更